

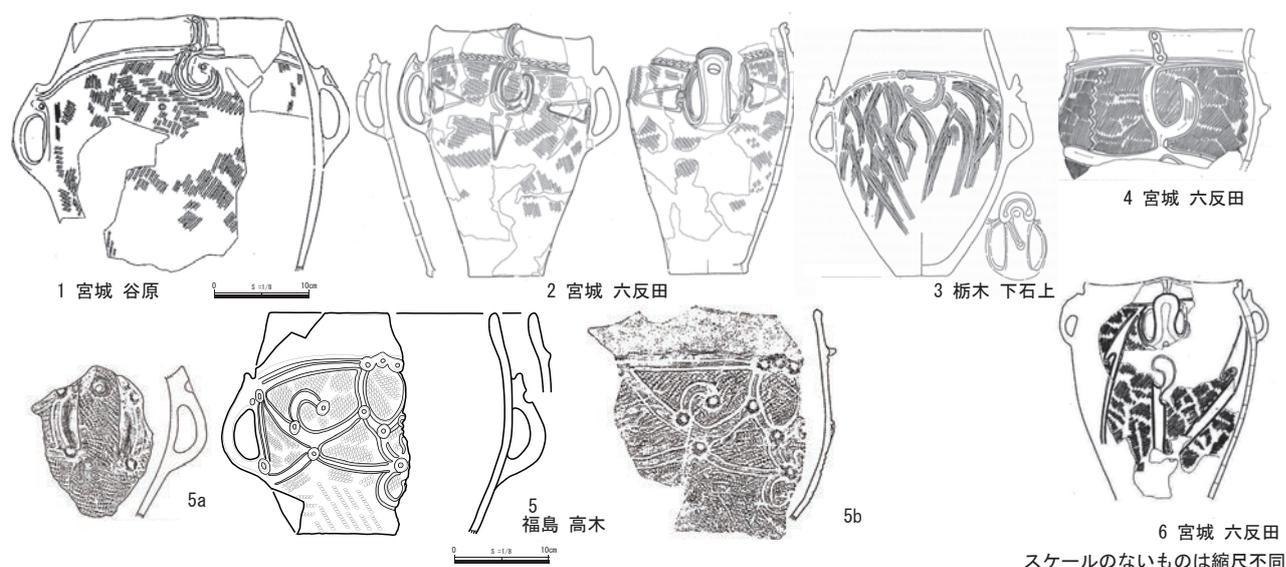
加曽利E系列の土器群（続） - 加曽利E式の堀之内式への継承 -

稲村晃嗣

はじめに

加曽利E式を継ぐ土器は、称名寺式と一般にはいわれる。それに一考する機会を設けたいというのが本論の目的である。1985年における称名寺式土器に関する交流研究会では、拙者は称名寺式が成立することによって現れた加曽利E式に見られる変化を述べた（稲村1990）。もとより、称名寺式併行段階まで加曽利E式土器が残存する可能性は多くの研究者によって説かれていた。その土器に対する呼称方法も多様であり、またその呼称が示す土器群の内容も異なっていた。石井寛氏は、その土器群に対し、便宜的にとしながらも、加曽利E V式という呼称方法を提案した（石井1992）。

交流研究会の中では、関東地方の当該地域の土器群に関しては、石井寛氏、鈴木徳雄氏、稲村の3名が担当することになり、研究会実施および記録集編集の打ち合わせの中でも加曽利E V式という名前で拙者が担当する土器群についても呼称を行っていた。しかし、発表の中ではその名には触れず「加曽利E系列の土器群」という言い回しで発表を行った。その後も、当該土器については、公開する文中では加曽利E V式という名称は使用を控える傾向に置いた。その趣旨は、大別時期の問題をこの名称が持っていると考えていたからである。称名寺式土器の成立がイコールで縄文時代後期の成立というように関東の多くの研究者は考えるが、東北地方の研究者は、大木10式の終焉をもって縄文時代後期の成立と考える傾向がある。この傾向は、今に至るまで解決を見ていないし、東北地方の縄文時代中期末・後期初頭の境界と、関東地方の縄文時代中期末・後期初頭の境界を時間的に一致させることは至難である。大別時期の中期と後期の



第1図 終末段階の両耳壺

境界について縄文時代研究全体の中で考えを深める必要がある。今回の発表の中では、近年拙稿を参考にしたうえで縄文時代中期末・後期初頭の土器群を論じた論考の中に加曽利E V式（加曽利E 5式）の型式名を使用する研究者も一定数存在することから混乱を避け、便宜的にはあるが加曽利E V式の呼称を用い以下の議論を行う（太田圭2023他）。なお、以下石井寛氏、鈴木徳雄氏の称名寺式7段階区分を参考に論じる。

加曽利E V式の定義は、称名寺式の成立に合わせて加曽利E IV式が変化した土器群で、称名寺式期に継続した加曽利E系列の土器群ということになる。

その場合、称名寺Ⅱ式（称名寺式第6・7段階）の加曽利E系列の土器群を加曽利E V式と呼ぶのかどうかという問題が生じる。問題点としては、その土器こそが、綱取Ⅰ式なのではないのかという問題である。

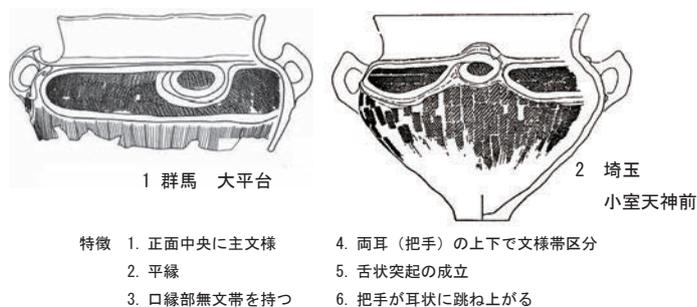
研究史的には拙は堀越正行氏の「施文系統と編年の改正（予察）」（1971）に関心を持つ。かつて、鈴木公雄氏の「安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数」（1969）に関心を持ち、施文順位において、縄文時代中期末から後期初頭においても有意義な研究ができるのではないかと考えたためである。堀越氏の当時の論に従えば、器面の擦消しに注目し、加曽利EⅢ式の技法が堀之内Ⅰ式の擦消しの技法に続くと考え、称名寺式に時間的な枠は与えず堀之内式の一つの類型であるとしたのである。研究の現状からすれば、ひとつ前の時代の議論という見方もできるが加曽利E V式・綱取Ⅰ式を堀之内Ⅰ式と同系統の土器群というとらえ方をすれば、あながち堀越氏の議論も広い地域的視野で見れば参考にできる部分があると考えられるからである。

そのようなことから、本論は、加曽利E系列の系譜はかなりの部分を縄文時代後期前葉の堀之内Ⅰ式に継承しているということを述べることを目的とする。

1 終末期の出土の両耳壺について

第1図4は福島県本宮町高木遺跡出土の両耳壺である。

報告書では、拓影の破片資料として掲載された（4a・4b）。実見の結果、図のような復元が可能と判断し再実測・図化した。この個体を注目したのは、以下の内容による。



第2図 中期末段階の両耳壺

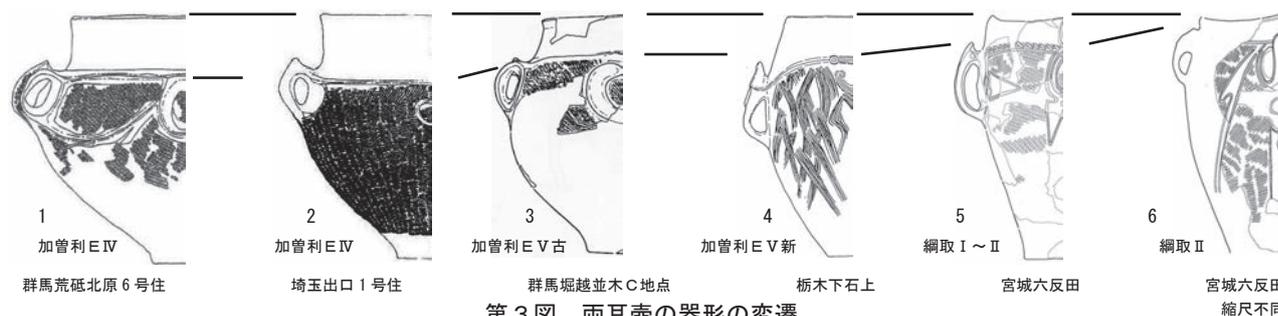
a. 両耳壺としてはかなり新しい時期の資料である。b. 両耳壺が中期加曽利E式に所属する時期から持つ特色的な要素を具備している。[正面中央にモチーフを有する、跳ね上がりのある耳状把手、胴下部の地文方向が縦位になる] c. 出土したのが福島県中通り地方の中央部分にあたる。

（1）終末段階の両耳壺

第1図に、終末段階の両耳壺をまとめた。この時期の両耳壺が出土するのは、栃木・福島・宮城などである。この時期の両耳壺に見られる特徴は第1図1の宮城県山元町谷原遺跡の事例などを参考にすると次のような点が指摘できる。

A. 樽型の器形を持つものが現れる

胴部との水平区画文が、器形が樽型になり把手の位置が相対的に下方になることにより、中央部がせりあがるようになる。このことにより、正面中央に広い器面空間が生まれ、単位文を施す傾向が強い。



第3図 両耳壺の器形の変遷

- B. 正面中央の舌状突起は、胴部の単位文の起点となる（中期の加曽利E式からの継承）。
 C. 中期以降の伝統として、無文部の口縁と平縁の特徴が崩れる。

正面中央や、把手直上に縦位に隆帯を施すものが現れる。

（この時期に至るまで、おそらく蓋をして使う道具であったのではないかと推測する。把手上部にひもをかけ口縁部に張った蓋・膜を縛っていたのではないかと推測する。その結果、2個の把手を使い蓋をかけるため、胴部正面中央が他者に見える器面空間となり、単位文などが施されたと考える。）

（2）両耳壺の器形の変遷

第3図に、中期末から後期初頭の終末段階の両耳壺の器形の変化をまとめた。また、第2図には中期後葉の両耳壺の典型例を示した。

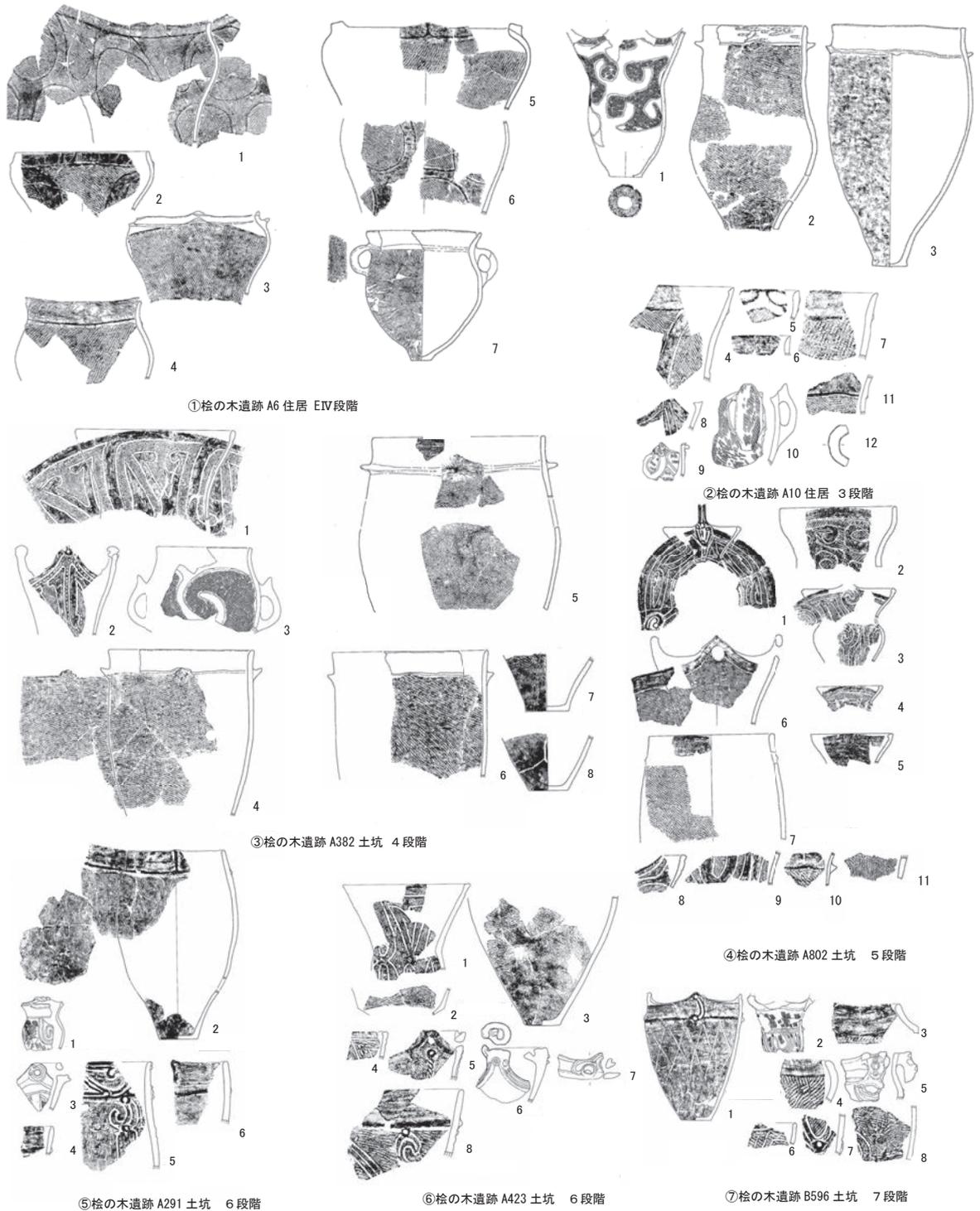
第2図1以前の両耳壺については、小型のものもあり壺状を呈するものも多いことからこの器種には両耳壺という形式名称が使われていると考えられるが、中期末の両耳壺は、第3図1・2のように鉢状の器形が多い。口縁の無文部は直立する傾向にある。この段階で、舌状突起が成立していることが重要である。3の加曽利E V式段階になると、口縁の無文部の上下幅が狭くなり内傾する傾向にある。また、4など加曽利E V式中葉から後半段階になると、口縁部無文帯の区画が水平ではなく中央がせりあがるものが現れる。器形もやや縦長になるものが現れる。5の綱取I～II式の段階になると、把手の有無以外では、深鉢と変わらぬ形状となるものが多い。6の綱取II式段階の両耳壺は事例は極めて少なく例示した六反田遺跡が代表資料となる。この段階では、把手の有無のみで深鉢とかわらない器形となる。

このようにしてみると、両耳壺が加曽利E式から綱取式または堀之内式へ土器の変遷に大きな役割をなしていたと考えられるのではないかと考える。この点は、太田氏の考察と相応する（太田2023）。

2 栃木県の状況（第4図）

茂木町の桜ノ木遺跡の加曽利E IV式以降の加曽利E系列の土器を見ていく。A6住居では玉抱文の加曽利E IV式（①-1）に両耳壺（①-7）が伴う。この段階には、砲弾状の深鉢は伴っていないが、口縁部無文帯を広くとる器形が存在している（①-4）ことが注目される。A10住居は3段階の資料と考えられるが、この段階には舌状突起が施される砲弾状の器形の深鉢が存在している（②-2・3）。いわゆる牛蛭式の主たる分布域の外にある地域でこの器形が成立しており、砲弾状の器形は加曽利E系列の中で生成されることが注目点である。両耳壺（②-10）も存在している。A382土坑は4段階の資料と考えられる。称名寺式も伴い（③-1・2）、安定して舌状突起を有する砲弾状の深鉢（③-4～6）も存在する。両耳壺には明確に渦文を有する（③-3）。渦が大形で、モチーフ上端が開放されていることが特徴である。A802土坑もほぼ同様の傾向である。A291・A423土坑はいずれも、6段階に相当すると考えられる。B596は7段階の

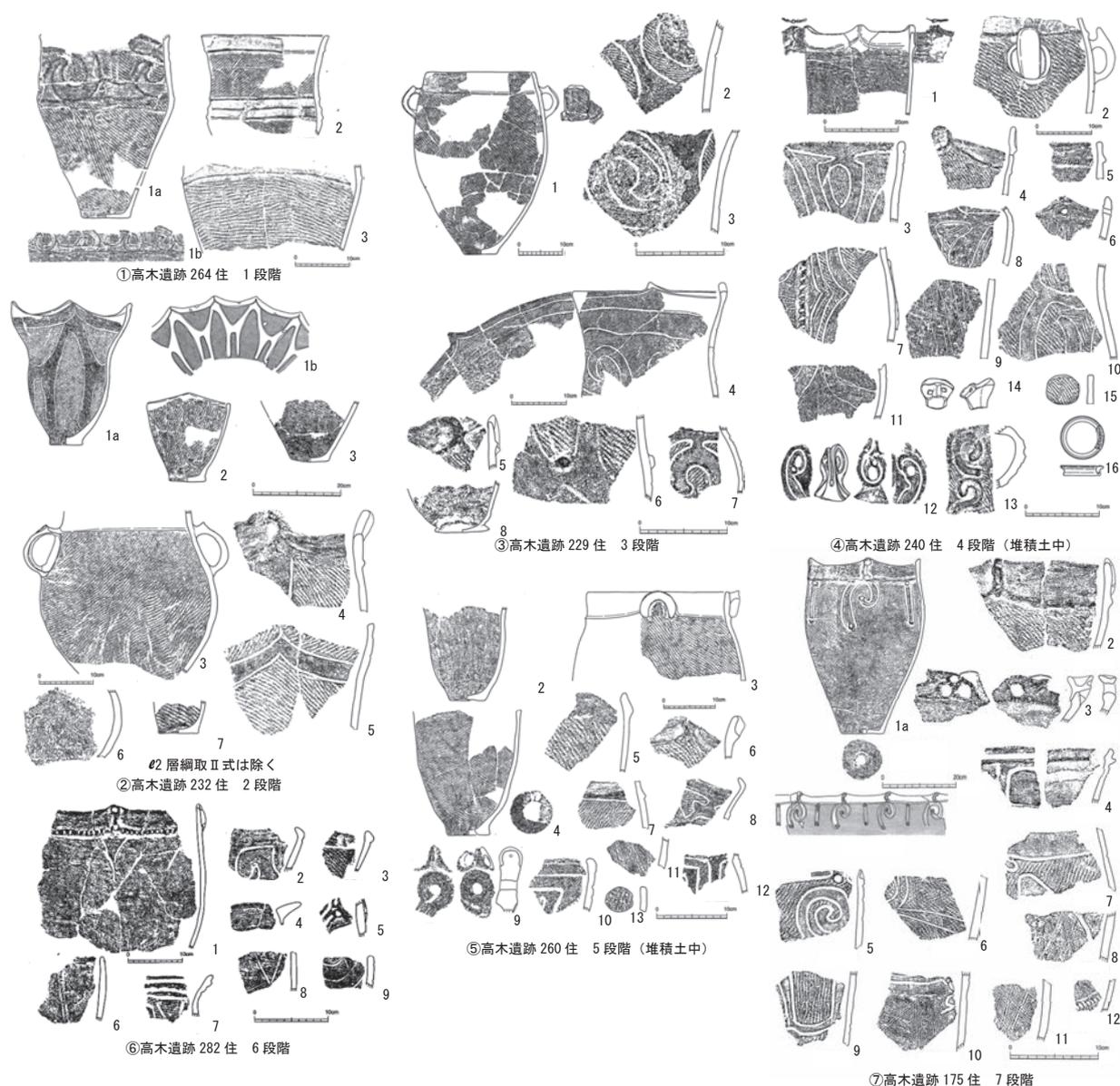
資料と考えられる。栃木県域においては、A291土坑⑤-2の様に砲弾状の深鉢の地文に縄文が採用されないものが増加する傾向がある。また、B596土坑⑦-1のような地文に格子目状沈線文があることは注目したい(第6図B-5-2のようなX字状文化した対向U字文類型の加曾利E V式の影響が考えられる)。これら、6・7段階の土器群が東北地方南部の綱取I式と同じ変化をして、第6図C-8-2・3のような土器へと変化するものと思われる。



第4図 栃木県の加曾利E系列の土器群とその周辺

3 福島県の状況（第5図）

本宮町高木遺跡の遺構出土事例を、時期を勘案し載録した。264住は大木10式中の新段階の資料と考えられる。加曾利E IV式併行とみる（千葉県に共伴事例がある）。鱗状の隆帯が3条になる部分が見られる。232住は2段階の資料と考える。②-1aは岩坪タイプの加曾利E V式である。両耳壺が存在する（②-4）。②-5は、牛蛭式である。様相としては加曾利E V式に在在系の牛蛭式が伴っていると見える。229住居は3段階に相当すると考える。称名寺式（③-2・3）、両耳壺（③-1）、関沢類型（③-4）、対向U字文のE V式（③-6）など殆ど北関東の加曾利E V式と変わらない。240住は4段階の資料と考えられる。称名寺式に加曾利E V式が共伴する。両耳壺も出土する（④-2）。砲弾状の器形の深鉢（④-1）も存在する。260住は5段階の資料と考えられる。⑤-3の砲弾状の深鉢が特徴的で逆U字状の添付文が施される（牛蛭式由来か）。282住は6段階の資料と考えられる。175住は7段階の資料で、⑦-1aには両耳壺（第7図D-6-4）に由来する渦文が単位文として擦消し縄文手法で施文される。上記のように当地域の状況は、ほぼ、加曾利E系列の変化でとらえられる。



第5図 福島県の加曾利E系列の土器群とその周辺

4 各地の土器群の推移

前頁まで見たことを踏まえ、さらに先行研究の成果を参考にして北関東から、仙台湾に至る地域の土器の変遷を図示してみたい。参考にしたのは、上野（2011）、千葉（2013）、江原（2007, 2016）、太田（2023）各氏等の研究である。前項でみたように、網取式を生成する福島県南部は加曾利E V式の段階においては北関東とほぼ同じ動きをする。網取I式は、大木式の影響下で成立すると考えるより加曾利E式を基盤として成立すると考えたほうが良い。福島県北から仙台湾及び仙台湾以北にかけては、関東の称名寺式7段階

	示準資料 称名寺式 A	神奈川・東京・埼玉 千葉・群馬 B	栃木・茨城 C
加曾利E IV 0			
称名寺1段階 4490 (2540ca1BC) ~ 加曾利E V 1			
称名寺2段階 加曾利E V 2			
称名寺3段階 ~ 4395 (2445ca1BC) 加曾利E V 3			
称名寺4段階 4395 (2445ca1BC) ~ 加曾利E V 4			
称名寺5段階 ~ 4280 (2330ca1BC) 加曾利E V 5			
称名寺6段階 4280 (2330ca1BC) ~ 加曾利E V 6			
称名寺7段階 ~ 4235 (2285ca1BC) 加曾利E V 7			
堀之内1 1/5 4235 (2285ca1BC) ~ 8			

A-1-1 稲が原 B4 号住
A-2-1 権田上 1 号住
A-3-1 寺野東 SK035
A-4-1 寺野東 SK174
A-5-1 上り戸道跡 SK1608
A-6-1 八剱 SK115
A-7-1 新山貝塚 SK114

B-0-1 ~ 3 前原 4 住
B-1-1 ~ 4 寺脇 7 号住
B-2-1 ~ 3 栗生
B-3-1 ~ 3 上布田 S103
B-4-1 ~ 3 貫井二丁目 J2 号住
B-5-1 ~ 3 清水が丘第 4 号住居址
B-6-1 ~ 4 荒砥二之塚第 33 号住

B-7-1 ~ 4 浦ノ東貝塚
B-8-1 大膳野南 2 西広 3 吉見台
4 浦ノ東貝塚

C-0-1 ~ 3 寺野東 S1539
C-1-1 ~ 3 寺野東 S1210
C-2-1 ~ 4 三輪中野 S1023
C-3-1 ~ 4 寺野東 SK035
C-4-1 ~ 3 松ノ木 A382 土坑
C-5-1 ~ 2 松ノ木 A302 土坑 3 寺野東
C-6-1 ~ 2 松ノ木 A423 土坑 3 萩の平 SK114

4 萩の平 SX39
C-7-1 ~ 2 松ノ木 B596 土坑 3 上の内 SK677
4 萩の平 SX45
C-8-1 ~ 2 寺野東 SK1205 3 玉取向山
18 号土坑

第6図 東関東の加曾利E系列の土器群とその周辺

階区分を参照しながら土器の配置を行ったが、加曾利E系列の土器群との十分な前後関係・平行関係の検討がなされたわけではない(第7図E・F列)。先ず、下ノ内、六反田遺跡などの後期初頭から前葉の土器の編年体系を整備し門前式の推移と比較検討を行い、大木10式が変容して形成された後期初頭土器群の解明を行い、そのうえで南方の土器群との比較検討を行いたく、今後の検討課題を残す。下記の図はおおよそその変遷を示すが、検証が必要な部分を多く残すため今後検討を深めたい。



第7図 東北の加曾利E系列の土器群とその周辺

5 堀之内1式への継承

最後に、上記に見たことを踏まえて、堀之内1式の特徴のいくつかを加曽利E式からの継承という観点で見たい。

(1) 単位文

堀之内1式土器をみると、初期に4単位、のち3単位の波状口縁が見られ、その波頂下に単位文が施される場合が多い。

具体的には、佐倉市吉見台（第9図4）の例が挙げられる。単位文に当初採用されるのは、大小の渦文(+剣先文)である。渦文の由来は、加曽利EIV式から続く両耳壺の正面中央の渦文であると考えられる。また、両耳壺の深鉢化に伴い、胴部の施文空間が下方に拡大し、剣先文や垂下文が付加される、若しくは渦文自体が縦位に延長されて描かれるようになる（第8図16）。蕨手文も同様の変化の過程の中に位置づけられる（第8図13・14）。

(2) 垂下文

また、堀之内1式の文様の特徴の一つに垂下文があげられる。隆帯が垂下するものについては第6図C-5-3などが祖型であると考えられる。H字状のモチーフが垂下するものについては、第9図6のような玉抱文が変容したものや、上記単位文の渦文+剣先文が細く書かれたものなどが祖型と考えられる。

(3) X字状文

加曽利EIV式の対向U字交錯文が、U字・逆U字が接触し直線化して描かれることによりX字状文が成立する。称名寺式の中にもこのX字状モチーフは取り込まれるが、綱取式・堀之内式にも多く採用される。また、右記F群の中にもこのモチーフは影響を与え、胴上部の方形区画の中にX字状モチーフが多用される。F群の方形区画文自体は第7図E-5-3のような大木10式系譜の土器に由来するが、そこに用いられるX字状モチーフは、加曽利E V式に由来する。袖窪式とされた土器は加曽利E式の影響を受けているとすることもできる。

(4) C群土器

関沢類型（第6図C-3-2）は、称名寺式の成立の影響を受けて加曽利E式の中に現れた土器群であり、称名寺式より、より周辺地域へと浸透している傾向がある。これらは、第8図のC群土器に変化していくと考えられる。従って、これも加曽利E式の系列の中で変容し成立していく土器ととらえることができる。

(5) 注口土器

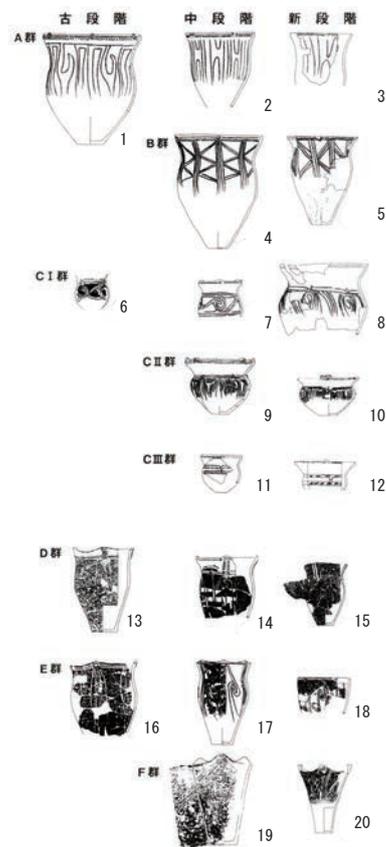
加曽利E式には瓢型土器が用意され（第6図C-0-3）、加曽利E V式になっても継承される。さらには、変化して堀之内1式の注口土器に推移するものと思われる。

(6) 浅鉢

浅鉢は、加曽利E式の典型的な器形といえるまでには存在していないが、加曽利E V式の中にはそれを見ることができ、堀之内式まで継承する。この状況は、加曽利E式の中のみの変遷ではなく、大木10式の浅鉢（第7図E-0-1、D-1-4・5）の影響を受けていると思われる。

(7) その他

本論の最初に取り上げた両耳壺は、関東の堀之内式の中には見ることはできない。中期後半以降、分布域は北遷していくが、関東地方にはその姿は後期前葉にはとどめなかった。飲食儀礼の習慣・習俗が変容したものと考えられる（鈴木徳雄氏の指摘がある）。



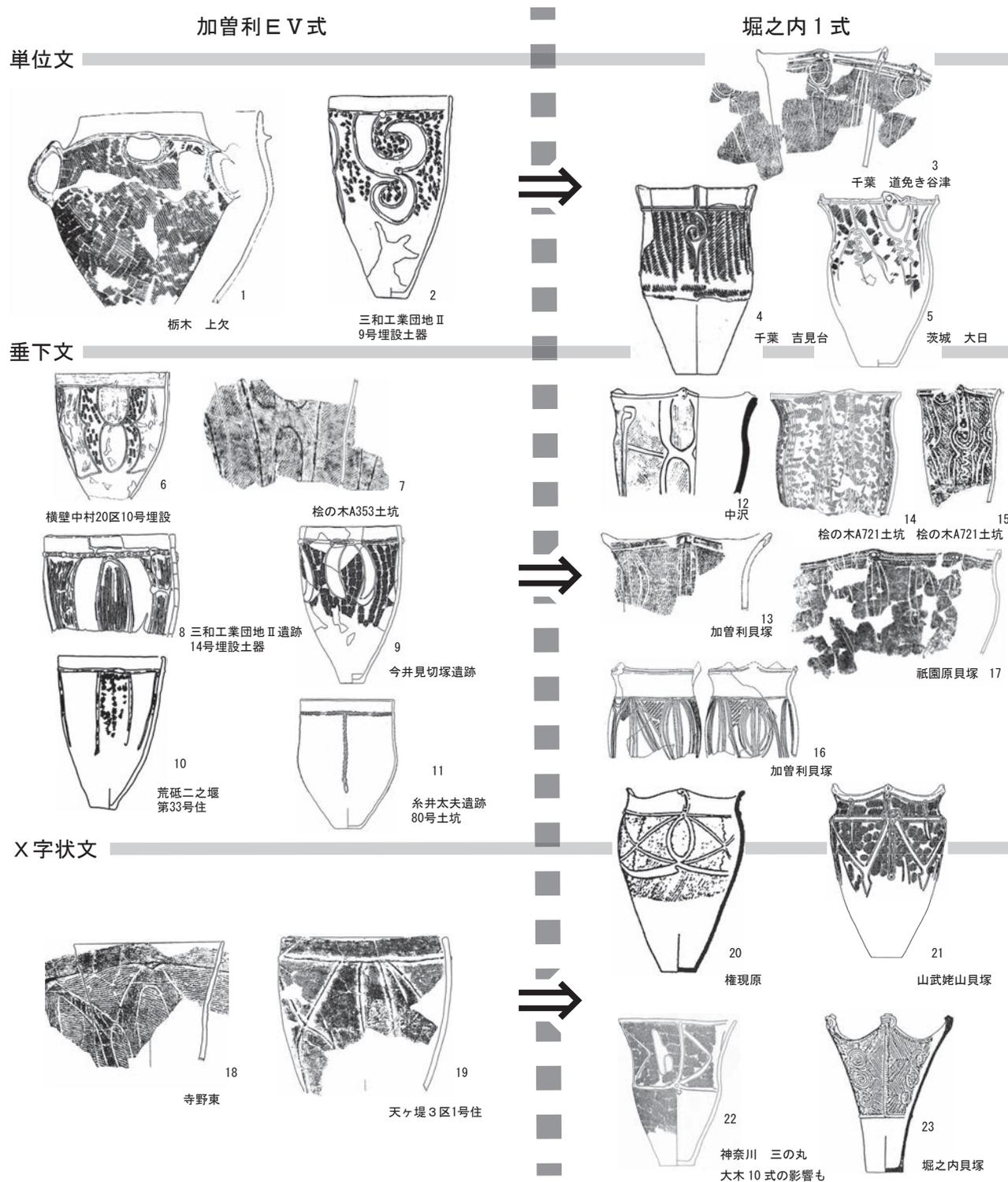
1: 平尾 NO.9 (東京) 2・7・12: 下北原 (神奈川)
 3・4: 華蔵台南 (神奈川) 5: 岡上丸山 (神奈川)
 6: なすな原 (東京) 8: 丸山台 (東京)
 9・11: 帷子峰 (神奈川) 10: 平尾台原 (東京)
 13・15: 西広 (千葉) 14・18: 伊篠白幡 (千葉)
 16: 祇園原 (千葉) 17: 中野僧御堂 (千葉)
 19: 宮本台 (千葉) 20: 木戸作 (千葉)

堀之内1式土器のA群からF群の6分類

(石井寛 1993 横浜市牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡の分析)

- A群 称名寺式土器の文様構成を引き継ぐ一群
- B群 複数沈線により懸垂文を表現し、それを斜位に連結する斜行文を組み合わせた一群
- C群 口縁部から頸部屈曲部にかけてを無文帯とし、以下を主要文様帯とする一群
- D群 口縁部に無文帯を有し、頸部下に文様帯を有する綱取式の器形文様構成を採る一群
- E群 D群から口縁部無文帯を省略し、A群の口縁部を採用した形で捉えられる
- F群 朝顔形の深鉢を基本とし、従位の懸垂文・隆帯を口縁波頂部から垂下させ、更に文様帯下端区画をも有する、区画文の発達した一群

第8図 堀之内1式の6分類



第9図 堀之内1式への継承

6 まとめ

加曾利E系列の土器群は、上記のように堀之内式の中に多くの影響をあたえているとみることができる。中期末には、関西の中津式または北白川C4式の影響を多く受け、関東地方においては称名寺式が成立する。称名寺式は、関東地方南部から周辺地域に分布を拡大するが、その拡大の先では各地で加曾利E系列の土器群が分布を拡大している。称名寺Ⅱ式に至り称名寺式の拡大の勢いが止まるとともに、加曾利E系列につながる土器が分布を拡大する。その土器こそが、関東では堀之内式、東北南部では綱取式となるのである。

参考・引用文献

論文等

石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』9
財団法人横浜市ふるさと歴史財団

石井 寛 1993 「堀之内 I 式期土器群に関する問題」
『牛ヶ谷遺跡・華蔵台遺跡』
港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告14

石井 寛 1995 「原出口遺跡 20 号住居址出土土器群をめぐって」
『川和向原遺跡・原出口遺跡』
港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告19

稲村晃嗣 1989 「鴻ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群」
『考古学の世界』慶應義塾大学民族考古学研究室

稲村晃嗣 1990 「加曾利E系列の土器群」『調査研究集録』7
横浜市埋蔵文化財センター

稲村晃嗣 1994 「両耳壺の研究ノート」『民族考古』2
慶應義塾大学民族学考古学研究室

稲村晃嗣 1997 「IV 考察 1 11 号住居跡覆土出土遺物について」
『横欠遺跡（本文編）』北上市埋蔵文化財調査報告 30

稲村晃嗣 2004 「千葉県山武姥山貝塚出土の縄文時代
後期初頭土器について」『時空をこえた対話—三田の考古学—』
慶應義塾大学民族学考古学専攻設立25周年記念論集

稲村晃嗣 2008 「門前式土器」『総覧縄文土器』アムプロモーション

今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究（上）『考古学雑誌』63-1

今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究（下）『考古学雑誌』63-2

上野真由美 2011 「加曾利E式土器の終焉と称名寺式土器の関係」
『研究紀要』第25号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

江原 英 2007 「東関東の様相」『第20回縄文セミナー
「中期終末から後期初頭の再検討」』縄文セミナーの会

江原 英 2016 「北関東地域の様相」『称名寺貝塚と称名寺式土器』
横浜市歴史博物館

太田 圭 2023 「縄文時代中期末葉から後期前葉における土器群と
遺構の関係について—福島県域における屋外土器埋設遺構の分析と
その位置づけ—」東京大学考古学研究室研究紀要（36）

押山雄三 2002 「東北地方南部における縄文後期前葉の土器」
『第15 回縄文セミナー 後期前半の再検討—記録集—』
縄文セミナーの会

鈴木公雄 1969 「安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数」
信濃21-4

鈴木徳雄 1999 「称名寺式関沢類型の後裔—堀之内 1 式期における
小仙塚類型群の形成—」『縄文土器論集』縄文セミナーの会

鈴木徳雄 2007 「称名寺式と異系統土器の共存の問題
—諸類型の形成 過程と土器群の編成（覚書）—」
『縄文社会の変動を読み解く予稿集』
縄文社会をめぐるとシンポジウム 5

千葉 毅 2012 「三十稲場式期における「関東系」土器群の様相」
『三十稲場式土器文化の世界—
4・3ka イベントに関する考古学現象②—』津南シンポジウムⅧ

千葉 毅 2013 「関東甲信越地方における称名寺式土器と
加曾利E V 式土器の混在の様相」『関東甲信越地方における中期
後期変動期 4.3ka イベントに関する考古学現象③』

堀越正行 1971 「施文系統と編年の改正（予察）」ふれいく 2号

馬目順一 1982 「南東北—いわき市愛谷遺跡出土品—」
『シンポジウム堀之内式土器』市立市川考古博物館

報告書等

飯野町教育委員会 2003 『和台遺跡』飯野町文化財調査報告書5

市原市文化財センター 1999 『祇園原貝塚』
市原市文化財センター調査報告書60

市原市文化財センター 2005 『市原市西広貝塚』
市原市文化財センター調査報告書93

大胡町教育委員会 2004 『堀越並木（A・C地点）遺跡』

大迫町教育委員会 1986 『観音堂遺跡』大迫町埋蔵文化財報告書11

北上市教育委員会 1978 『八天遺跡』文化財調査報告24

北上市教育委員会 1979 『八天遺跡』文化財調査報告27

北上市教育委員会 1995 『横欠遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告20

北上市教育委員会 1997 『横欠遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告30

北上市教育委員会 2008 『横町遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告90

群馬県企業局他 2004 『伊勢崎市文化財調査報告書53：
三和工業団地2遺跡』群馬県企業局他

群馬県教育委員会他 1989 『大平台遺跡』
群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告82

国際文化財 2014 『大膳野南貝塚発掘調査報告書』
千葉市教育委員会

埼玉県教育委員会 1977 『前島・島之上・出口・芝山』
埼玉県遺跡発掘調査報告書12

埼玉県立博物館 1981 『小室天神前遺跡』
伊奈町天神前遺跡調査会

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000
『上野平遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書333

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2009
『川目 A 第6次発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書525

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 『荒砥二之堰遺跡』
群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告36

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 『今井三騎堂遺跡・
今井見切塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告350
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995
『柳上遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書213
（財）栃木県文化振興事業団 1985 『上欠遺跡』
栃木県埋蔵文化財調査報告69

（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999
『寺野東遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告224

財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2001
『寺野東遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告250

財団法人とちぎ生涯学習文化財団 2003 『荻ノ平遺跡』
栃木県埋蔵文化財調査報告270

財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 2003
『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告』
福島県文化財調査報告書402

財団法人茨城県教育財団 2006 『玉取向山遺跡』
茨城県教育財団文化財調査報告263

佐倉市遺跡調査会 1983 『千葉県佐倉市吉見台遺跡
発掘調査概要Ⅱ』佐倉市教育委員会

昭和村教育委員会 1996 『糸井大夫遺跡』
昭和村埋蔵文化財発掘調査報告書6

仙台市教育委員会 1981 『六反田遺跡発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書34

仙台市教育委員会 1995 『六反田遺跡発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書199

仙台市教育委員会 1990 『下ノ内遺跡発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書136

千葉市教育委員会 2017 『史跡加曾利貝塚総括報告書』

千葉市文化財調査協会 2000 『千葉市愛生遺跡』

調布市遺跡調査会 1992 『調布市上布田遺跡—第2地点の調査—』
調布市教育委員会 調布市埋蔵文化財調査報告23

とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2001 『八剣遺跡』
栃木県埋蔵文化財調査報告254

練馬区遺跡調査会 1985 『貫井二丁目遺跡』東京都住宅局

パスコ 2019 『新山貝塚（4）』船橋市教育委員会

日高市教育委員会 2006 『寺脇』日高市埋蔵文化財調査報告32

日立市埋蔵文化財発掘調査会 2002
『上の内遺跡発掘調査報告書』日立市文化財調査報告61

松の木遺跡調査団・本田技研工業株式会社 2005
『松の木遺跡Ⅰ』

松の木遺跡調査団・本田技研工業株式会社 2006
『松の木遺跡Ⅱ』

福島県文化センター遺跡調査課 1990
『真野ダム関連遺跡発掘調査報告』福島県文化財調査報告書231

福島県文化センター遺跡調査課 1996
『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』福島県文化財調査報告書322

福島県教育委員会 1990 『東北横断自動車道遺跡調査報告7』
福島県文化財調査報告書232

府中市遺跡調査会 1985 『清水が丘遺跡』
武蔵国府関連遺跡調査報告 東京都建設局

前原遺跡調査会 1976 『前原遺跡』

宮城県教育委員会 1984 『東北自動車道遺跡調査報告書』
宮城県文化財調査報告書99

宮城県教育委員会 2007 『山居遺跡（縄文時代編）ほか』
宮城県文化財調査報告書214

山元町教育委員会 2016 『谷原遺跡』
山元町文化財調査報告書13